

受賞作品

最後通牒ゲームの謎

—進化心理学からみた行動ゲーム理論入門

小林 佳世子 著

日本評論社 312 ページ、1,900 円（税別）



書評

意思決定の謎を明らかに

大阪大学特任教授 大竹 文雄

本書は「最後通牒ゲーム」という世界で最も多く行われてきた経済学の実験をもとに、科学の発展を謎解きで示した物語である。単なる読み物ではなく、謎を解くための様々な仮説が明確に示される。多様な分野の研究者たちが仮説を検証していく過程を本書は楽しく伝える。高校生から読める優れた啓蒙書だ。

最後通牒ゲームは、渡された千円を見ず知らずの2人で分けあうというとても簡単な実験だ。片方が人が分配提案をしてもう片方が人が受諾すればその金額が配分されるが、拒否するとどちらもお金がもらえなくなる。相手に1円を配分するという提案が伝統的経済学の予測だ。しかし、実験結果は相手に3割以上配分提案するものが多く、受け取る方は3割以下だと拒否するものが多い。

この結果は、普通の人には当たり前なのに、経済学者には謎だ。意思決定の裏には、人の目や評判を気にしたり、不公平を嫌ったり、裏切り者を見つけたりするという私たちの特性が隠されている。本書では、私たちの意思決定の裏に隠された謎が、次々と解き明かされる。

私たちは良い人に見られたいし、裏切り者や非協力的な人を見つけることが得意で、罰を与えることも好きだ。ゴシップ好きや「自粛警察」の存在もその結果だ。しかし、そうした特性が、社会を形成する上で重要な役割を果たしていることも本書から実感できる。